

佳作 受賞



石川県立金沢泉丘高等学校

2年 浦田 悠月 さん

作品名：「発展途上国は不幸せ？」

▽受賞コメント

作品の執筆を通じて、自分が一番「伝えたいメッセージは何か」を考え、整理する機会となりました。また将来に向けて漠然としていた考えをより明確にすることができました。こうして書きあげた作品が入賞し、とても嬉しいです。

▽作品本文

「貧困」と聞くと発展途上国を連想する人も多いのではないのでしょうか。かつて私も「貧困」が存在するのは発展途上国だけだと思っていました。また、発展途上国は幸せではなく、不便な生活を送っているという固まったイメージも持っていました。それらの考えが覆されたのは、私が小学六年生の時でした。

私は家族旅行として、フランスに住む友人を訪ねました。フランスに対して豪華で豊かな先進国というイメージをもっていたため、理想通りの風景の中に潜む「貧困」に衝撃を受けました。有名な観光地で物乞いの少女に出会ったのです。その少女は私たちに唐突にフランス語で話しかけてきました。そして、私の友人の家族が何か言うと、少し怒ったように行っていました。フランス語が分からない私は何を話しているのか理解できませんでしたが、後から聞くと、お金をあげられないと伝えると、物乞いの少女は汚い暴言を吐いて去っていったそうです。美しく優雅な観光地で感じた深い格差は私の記憶に強く残りました。私と同じ年齢くらいの少女の、笑い方を忘れてしまったかのような陰しい表情は今も頭の中に浮かんでくるのです。

その一方で、授業で聞いたサモアの話は私をさらに混乱させました。サモアはフランスや日本と比べ、明らかに技術が劣っているため、生活は不便なものだろうと思っていました。しかし、サモアの人々にとってはその生活が当たり前でむしろ幸せそうだったのです。さらに、日本からのボランティアも人材確保や物資をくれる人たちというように認識されてしまうような、ボランティア慣れという現状すらあるようです。

発展途上国と聞くと、私はどうしても不幸せや、貧しさを連想してしまいますが、そのような簡単な言葉で表してしまってもいいのでしょうか。そこに住む人たちの暮らしの表面しか知らないのに、勝手に自分の想像で判断してしまっているのではないのでしょうか。

スマートフォンがあって冷暖房設備の整った場所ですごしているから幸せなのか。伝統的な暮らしは不便なのか。発展途上国だから貧しい、先進国だから幸せと考えるのは正しいのか。このように、今まで正しいと思ってきたことを一度疑ってみました。そうすると自分の生活している狭い環境だけを見て、他の人の人生を不幸だと決めつけてしまっているのではないかと思えたのです。

自分に見えているものや想像だけでは、困っている人の役に立つどころか一方的な押し付けにすらなってしまいます。相手の立場に立って、相手の存在を意識して、知っていこうとする姿勢が大切なのだと改めて思います。

世界から見るととても小さな存在でしかない自分自身にもできること。それは、自分の固定観念によって決めつけて納得することでも憐れむことでもありません。固定観念によって語られた幸せを押し付けてしまわないよう、いろいろな世界を知り、広い視野を持つことが私にできる小さくても確かな一歩だと思います。

世界中の困っている人々を救うことはたった一人の高校生にはできないかもしれません。だからといって、見て見ぬふりをするのではなく、間違った固定観念を壊しながら、視野を広く持って知っていこうとする姿勢が大切なのだと私は思います。